日本ラカン協会　秋のワークショップ

今、精神分析臨床は「性」に如何に向き合えるか

日時：2022 年 10 月 30 日（日）14:00～18:00
場所：オンライン

参加費：無料
提題者：久保田泰考氏（滋賀大学）
牧瀬英幹理事（中部大学）
コメンテーター：上尾真道理事（広島市立大学）
司会：小林芳樹理事（小林心療内科・精神分析室）

＊今回のワークショップでは実際の症例も提示され、参加者にはそこで知り得た患者に関する個人情報に対する守秘義務が発生します。参加申込をした段階で、この守秘義務に同意したものと見なします。

主の言説が優勢な時代においては異性愛的性が規準であったが、20 世紀後半になると主の言説は資本主義の言説に姿を変え、科学の進歩により性と生殖が分離されるにつれ、この規準は変質した。1968 年にロバート・ストーラーが性とジェンダーの区別を提唱し、前者を生物学的、後者を心理社会的と規定することによりジェンダー理論を打ち立て、性同一性障害者に対する性転換手術が公的医療として提供されるようになった。

フロイトは主体における両性具有を常に想定していたが、それは生物学的ではなく精神的なそれであった。

ラカンにとって性とは生物学的事象ではなく、言語的事象であり、男か女かは言説によって決まる。古典期のラカンは、父の名や母の欲望の効果は、現実によってではなくパロールによって左右されると考えていた。親は彼らに欠けているもの、欲望を満たす対象として子をなすのであり、生物学的本性によってではない。同性の親を持つ子は性に接近できないというのは、自然主義者の発想である。ジェンダーを独自に解釈するポストモダン期のラカンにとって重要なのは、同性の親が愛し合うことで、不可能ではあるにせよ性関係の不在を埋めようとするその仕方である。

同性愛者はもはや、享楽に支配されるだけの存在ではない。彼らは批判者に背を向けると同時に、自身の家族を創ることで象徴界の系譜に記入されようとする。家族が自然に叶っているかはもはや問題ではない。家族は多元化したのだ。親になるということはもはや生物学的に決定されるのではなく、新しい命に文明を語り継ごうという主体の選択による。

とはいえ精神分析実践の現場は古い世代の言説への過激な非難攻撃や、同性愛擁護の政治

への熱狂とは懸隔している。ラカン派精神分析家のキャビネで展開されることは、主体の特異的な歴史、あるいはその軌跡における非意味に関わるのであり、普通であることとも共同体主義とも無縁である。享楽様式や個人史の特異性を標定し、ゲイやレズビアン、バイセクシャル、トランスセクシャルなどへの同一化ではなく、いかにして言語が主体の身体や性に結われているかを示すのである。

今回のワークショップにおいては、実際の症例や自閉症者における性の問題を通して、現代における性を精神分析の立場から考察する。

（小林芳樹）

ファルスは「それでない」、あるいは“it fiddles while Rome burns”

久保田泰考（滋賀大学）

フーコーは 70 年代にサドに関して次のように価値下げめいたことを語っている―「真理の欲望機能と欲望の真理機能」は「同じリボンの両面」である。そう語った時、彼が意味していたのは以下のことではないか―すなわち、自らの性的欲望について赤裸々に真理を語ることは、もはや法の壊乱を意味せず、それは既に言説の制度に取り込まれており、あるいはファルスは父の禁止を完全に経ないままでも享楽を生産する装置の一部品になっている。

当日は症例を参照しつつ、今日の市場システムが一層精緻な享楽のアルゴリズムを通じて、いわば「父無し」で、ファルスのシニフィアンのヒトのセクシャリティーにおける本源的な空疎さを、幻影を通じて(空疎さの仮想として？)実現しているのではないか、との現状認識について検討したい。

自閉症・性・存在

牧瀬英幹（中部大学）

「確かに、身体上に、性徴というあの謎めいた形のもとに現れるものは―これらは二次的なものでしかありませんが―存在に性別を与えます。なるほど、そうでしょう。しかし、存在とは、そのものとしての身体の、つまり性化された無性の a としての身体の享楽なのです。なぜなら、人が性的な享楽と呼んでいるものは、わたしたちにとって唯一重要なこの〈一〉を、つまり性的な関係という関係性としての〈一〉を、そのようなものとして、言表可能なもののどこにおいても確立できない、という不可能性によって徴づけられ、支配されているからです」(『アンコール』)　。

ラカンはここで、主体の存在が性別化された存在という定型表現の断裂、割れ目、遮断において現れることを、さらには、そうした主体における性と存在の関係（身体の享楽）が、

性的な関係という関係性としての〈一〉を確立することの不可能性によって徴づけられていることを示唆している。

この指摘は、性の問題に直面した自閉症者の苦しみを理解し、その解決の糸口を見出していく上で、欠かせないものであると言えるだろう。なぜなら、自閉症者の性の問題は、一見する限りでは感覚の過敏さや認知の極端さ、独特の思考などによる性同一性形成の難しさに起因するものとして捉えられるものの、その背景には常に、「自分とは何か」という存在に関する問い、あるいは〈他者〉との関係構築の困難に由来する「自分の居場所のなさ」に基づく苦悩が認められるからである。そして、そうした苦しみは時に、衝動的な問題行動や精神病様の症状を引き起こすことにもなるのである。

では、両者の関係性を考慮しながら、自閉症者の性の問題にアプローチしていくためには、どのような関わりが求められるのであろうか。本発表では、上記のラカンの指摘をもとに、フロイトの述べた「幼児の性理論」の意義を再考することを通して、この問題について考察する。また、そこから得られた知見を踏まえ、性的多様性を巡る問題に対して精神分析実践が如何なる貢献を為し得るかを明らかにしてみたい。

日本ラカン協会事務局
連絡先：〒487-8501 愛知県春日井市松本町 1200
中部大学生命健康科学部 55 号館 6 階 牧瀬英幹研究室
E- mail ： sljsecretariat@netscape.net